

大学女版・つか

つかこうへい



大学女版・つか

つかこうへい

つか版・女大学

つかこうへい

昭和59年3月5日 初版発行

発行者 角 川 春 樹



印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 鈴木製本所

発行所 株式
会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13 徳東京 3-195208
TEL 東京 (265) 7111 (大代表) 〒 102

Printed in Japan 0095-883154-0946(0)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

つか版・女大学

装丁・插画／和田誠

一月二十九日

この日みぞれまじりの雪。愚妻直子が、飛驒ひだの高山で買った蛇じやの目傘めがさをさし、雪道に下駄くだの跡を残しながらコトコト駈けて来る。美しい。まるで一幅の絵だ。オレをみつめて微笑ほほえむ。オレは胸がじんと熱くなる。これは愛だ。愛はいいなあ。薄汚れたこの東京では信じられないような光景だ。突然、愚妻が不憫ふびんになり、自由ヶ丘の通りにたむろするアバズレ女子大生らに殺意を抱く。

一月三十日

オレの恥かき本が並んでいるし、何よりも本屋には、「コスモなんとか」だの「アハハ」だのという憂国雑誌がわがもの顔に陳列されている昨今なので、絶対に本屋に近寄ってはならないと堅く言いおいてあるにもかかわらず、愚妻がまた何か雑誌を買ってきて料理のページをめくっている。

全く勉強熱心にも困ったもんだ。

しかしゲス雑誌も可愛い愚妻が手にしていれば品が良く見えてくるから不思議である。だいたいこのたぐいの雑誌は、講談社や集英社で（オレがじかに重役どもに聞いた話だから間違いはない）年も三十過ぎ、いっこうに嫁に行ける気配もなく、新入社員いびりしか楽しみのなくなったズベ公どもを、あんまり目ざわりでわずらわしいからと、一か所にまとめて隔離するべく企画されたものである。つまりはうば捨て山、いや、ズベ捨て部なのだ。

私は去年の夏、マスクをさせられて見学したが、その編集室は、空気のよんだビル地下のボイラー室の横にあった。

みるとウルトラマンの相手役としか思えない行かず後家どもが髪ふり乱し、クーラーをガンガンかけているというのにスカートの下からバタバタとうちわで風を送っては股座（またぐら）をポリポリかきながら机に向かっていた。それは、おぞましいとしか言いようのない眺めだった。

こいつらが「とんでる女のうんぬん」だの、「処女なんかなにさ」だのと企画しているから始末が悪いのだ。

この怪物たちはたいいてい仁丹好きで、総じて歯を磨かない。こいつらは、嫁にいけない恨みつらみで雑誌を作っているのだ。



東京じゃあ日曜日の歩行者天国でお産が見られたりするくらいだから、都会の女どもはハナからこんな雑誌をうのみにしたりしないだろうが、田舎に住む純真な娘さんたちはまともに信じてしまつてその氣になるから大變である。

ほつときゃ、日本にはまともな女がいなくなるのではないか、何とかこういう女性を健全な思想で導いてももらえないかと「月刊カドカワ」が依頼してきた。とは言いながらどうせまた似たような雑誌を作るんだろうと思つていたが、オレの喋ることをいちいちメモにとつてゐる編集長の鈴木が氣に入つた。

「もう世の女どもは救いようがなくなつてゐる、それにオレはフェミニストだし……」
と言いかけたとき、隣りに座つていたホステスの煙草の火のつけ方が氣に入らず、無意識のうちに蹴とばしていた。

「そうです。それをしていただければいいんです」と鈴木は言う。
そうだな、いま日本で女を蹴りつけられる男つてオレくらいしかないもんな。

一月三十一日

本屋で、二、三、男性雑誌を取りあげてページをめくつてみると、インテリアだの料理の作り方だのが当然のように実にこまごまと出ていたのには呆れかへつた。

「男がこんなもの読んでどうすんだ」

言ったきり絶句したが、そういえば半月ほど前、独身の田島（三菱勤務）の家を訪ね、玄關に出てきた田島が胸に抱いてたぬいぐるみが、妙に似合っていて気味が悪かった。

田島は煙草の灰が少しでも灰皿から飛んだりするとムツとした顔で話の間じゅうオレの右手を見つめていた。そして灰がじゅうたんの上に落ちようものなら、すぐさまワインレッド色の小型電気掃除機を取り出してコチヨコチヨそうじをする。

オレが「ここは一部屋か」と聞いた時など青筋たてて、

「いえ、ワンルームです！」

と怒鳴られた。

「ブルマンのコーヒーどうぞ」

と出された。色を見りゃコーヒーと分かるんだからいちいち男が言うなってんだ。

部屋の隅のベッド布団ふとんがしゃれているので、お世辞に、

「亀印かめじるしか」

と言ってやると、

「レノマです！」

と憤然としている。呆れて、

「どこが違うんだ」

と聞くと目を輝かし、

「亀印って衿に黒いべっちゃんがついてて鶴の絵柄かなんかが赤と白と金で下品に派手なやつでしょ、レノマはイタリアの……」

などと、とうとうと喋り始める。

さすがオレもカッときた。三十すぎた男がレノマもへったくれもあるかよ。

第一、年収一億はくだらないオレが知らないことを、月収十五万のおまえがなんで知ってんだと、腹立ちまぎれに布団に思いきりつばを吐き、ポケットから二十万ばかりつかんで投げつけてやった。

布団は亀印だよ。あつたかぽっかりいい布団じゃねえか。

ほんと近ごろこの手合いの男が多くなって困ったもんだ。
帰って愚妻にこのことを話すと、

「ひとはそれぞれ生き方があっていいじゃありませんか」

と言ってにっこり笑う。

美人は言うことが違うんだよな、もう。

まあこんな男は目にあまったときオレがツバ吐いて金投げてやれば済むことだが、鈴木がこの「女大学」のターゲットにしてくれというのは女だ。

世の五十発百発の女（五十発殴られたような顔の女、または百発殴っても腹の虫がおさまらないような女をこう表現する）が少しでもこの日記を読むことで、まっとうな人生を

歩むことを願う。

……しかしズベ公はズベ公で一生なおるもんじやないと思うんだけどな。きれいな女が落ちぶれたっていう話はよくあるが、アバズレが改心して美人になったって話は聞かないぜ。

二月一日

馬鹿は冬眠してればいいものを、この寒いのに、朝、新聞に目を通すとまたスベタ女がやらかしている。

ペットの猫を風呂ふろに入れ、乾かしてやるのが面倒で電子レンジに放りこんで乾かそうとしたんだという。

全くどうにかならんのかこのごろの女は。新聞を開ければ、こういうズボラな事件がちこちどころがっている。

猫のその後のあまりのむごたらしさに心が痛むのはもちろんのこと、オレがもっと許せないのは、テメエの勝手で飼いだめた猫でありながら、「拭くのが面倒」というその根性だ。

その女の言い草がふるっていて腹が立つ。

「だって雑誌に電子レンジで乾かすのが簡単に書いてあったんだもん」

と、しゃあしゃあとしたもんだ。そのくせ、こういう女に限って庭に墓なんか作ってや
つていかにも悲しそうな顔をしてみせたりするのだからやりきれない。

まあ女の、この残酷な素朴さが可愛いといやあ可愛いんだが、そのうち風呂あがりの
赤ん坊も電子レンジに放りこまれるようになるだろう。そう言えば愚妻もオレのところ
へ来たての頃、洗面器の中に粉石けんを放り込み、手でくるくるかき回してたことがあつ
たっけ。

「何してんだ」と聞くと「洗濯です」って。もの知らない女つてのはほんと可愛いな。
これが他の女だったら蹴り殺してたぜ。

二月三日

学生時代の友人の妙子というのが、娘のおひな祭りをするので遊びに来てくれという。
ズベ公の娘もちゃんと年だけはとるのかと呆れながら、行きたくなかったが相談ごともある
というので浦和まで出かけることにした。

七つになるくり子という娘は、玄関を開けたとたんオレにカミソリを向けて飛びかかっ
て来た。ズベ公の娘はズベ公の娘だ。オレも負けじと靴のかかとで娘の頭を殴ってやると
キャンキャンと犬のような声をあげ、ころけ回る。オレはそれでも腹の虫がおさまら
ず、靴の先で腹を蹴りつけると泡をふいて気絶した。ザマアミロってんだ。

だいたいこのガキは生まれたとたんからアバズレ面^{づら}で、さしものオレが、

「可愛いおじょうさんで」

と言えず、

「丈夫そうなお子さんで」

と言ってしまったほど不細工だった。

泡をふくガキを見て、さすが妙子もあわてたが、オレが売れっ子で偉いもんで文句も言うに言えやしない。

もともと顎^{あご}にしわをよせてしゃべる妙子とは話をするのもいやだったのだが、

「話はなんだ」

と聞いてやると、このくり子が五つの時からカミソリを振り回し、七つの祝いに額にソリを入れさせろとごてられ、ほんとほんと困っているという。

「どうしてこんな悪い子になったのかしら。いったい誰^{だれ}に似て……」

と泣くが、ふざけたことをぬかすな、テメエに似たんじゃねえか。妙子自身、大学時代全学連をやっているのだからソリ入れるくらいなんだってんだ、こん棒がカミソリに変

わっただけのことじゃねえか。七つで客をとってないだけありがたいと思え。

バリケードの中で、革命だ理論だ実践だとはざきながら男をとつかえひつかえしていた

のだから、いずれ娘も似たようなことをするのだらうとオレは思っていた。

つまりカミソリ振り回すのも胎教の成果ってわけじゃねえか。

こういうガキは大きくなってもロクな奴にならないのだから小学校を卒業したらトルコでも売りとばせと言うと妙子はオイオイ泣き出した。三十過ぎてきたない女は泣き方もきかない。

泣きたいのは何も知らずにテメエを嫁にもらって都庁に勤めてる亭主の方だ。

近ごろ新聞で非行少年少女が増えたというのも当然だろう。

全学連の学生紛争時代、こん棒ふり回して叫んでたズベ公どもが子を持つ親の年ごろになっているんだもの。親に似てこそその家庭教育じゃねえか。

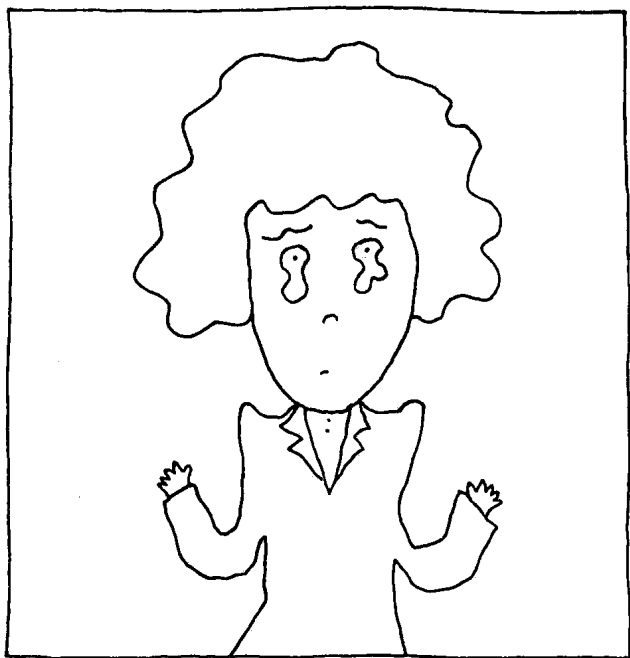
とにかく妙子って女はバリケードの中で即席ラーメンの奪い合いをしていたせいか、食い方が意地汚なくてイヤだ。テメエで出した茶菓子を一人で食ってやがる。

帰りぎわに娘が見送りに出て来ないのでカッときて、奥の間でふとんに横になり鼻血を出している娘の頭をいきなり蹴りとばしてやると、おびえた犬のような目でオレを見ている。

「許して下さい」

と言うが許さない。女が七つで鼻血出すなんて実に下品なことだ。

「キサマは人が帰るとき、またいらして下さいのひとことも言えんのか、このアバズレ



が」

と鉄の靴ベラでガンガン顔を殴ってやる。

また今日もひとつ良い行ないをしたと思うと嬉しかった。

帰って電話をしてみると、悪さをするたび、「つかさんに言いつけるからね」のひとこととでピタッとやめるようになったという。よかった。

が、オレは許さない。子供だと思うからいけない、とことんやってやろうじゃないか。

二月五日

今日は丸山の結婚式だ。

オレくらい立場になると祝儀は十万円以下というわけにもいかないし、披露宴で腹いっぱい食ったところでもとがとれるわけもないから頭にくる。最近披露宴に立食式が増え、ひきでものに鯛がないのでさみしい。やっぱり結婚式には鯛だ。

一応いちばん初めの主賓の挨拶をさせられたが、どうも乾杯の音頭をとる方が良い役まわりなんじゃないかしら。

あれこれ考えてガブ飲みしていたら、突然スリーピースのベストのボタンがブツツと落ちた。太ったのかな。

宴半ばになり、バカな司会者が、